

中国語を母語とする日本語学習者による機能動詞結合の習得について

宋 沛昱

1. はじめに

日本語を習得する際に、著者は語彙をたくさん覚えても、それだけでは足りないと感じている。語彙だけを覚えるのはそれほど難しいことではない。問題は、それらを日本語らしく自然に組み合わせて使うこと、すなわちコロケーションにあると気づいたのである。コロケーションの定義は研究者によって様々であるが、一般的に「二つ以上の語の慣習的な組み合わせ」と認識されている。コロケーションの中で、著者は特に「機能動詞結合」というものを習得する時に苦手と感じていた。例えば、「打撃」「ショック」のような何らかの動作性を持つ名詞を動詞と結びつけて使う場合は名詞の後ろにどのような動詞が共起するか、その結合について習得上はかなりの工夫が必要であると考えている。また、学習者の作文には、下線部のような機能動詞結合の誤用例が見られる。「*」が付いているのは誤用例である。

- (1) *安心で治療してください。(治療を受けてください/治療に専念してください)
(C050) ¹
- (2) *この病院が閉鎖されたら、市民の病患が受けにくくなり、付近の病院にも圧力を与えることは確定されています。(影響を与える/圧力を加える) (C008)
- (3) *レジャーをするとともに、勉強の効率は上がることができる。(趣味の時間を過ごす)
(CG048) ²

(1)の例は、機能動詞の選択上の誤りであり、(2)は、結合自体は正しいが、文脈をみると適切とは言えない。(3)は、動作性を持たない「レジャー」が動作性名詞として使われている。村木(1991)は、機能動詞を「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能を果たす動詞」と定義しており、機能動詞と名詞との結びつきを機能動詞結合と呼んでいる。具体的な例として、「影響を与える」「においがする」などが挙げられる。機能動詞自体の意味が薄く、推測しにくいだけでなく、名詞と機能動詞の結びつきかたは決まっており、学習者の母語と日本語は必ずしも一致しないため、これが習得上の困難点であると考えられる。

2. 先行研究

2. 1 日本語コロケーションについての研究

田野村(2012)は、「日本語研究においてコロケーションの用語は使用の歴史が浅い。

¹ 「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」から抽出した誤用例である。

² 「日本語学習者作文コーパス」から抽出した中級学習者の誤用例である。

近年でこそ日本語研究者がその用語に接する機会が徐々に増えてきたとは言え、その位置づけは日本語研究の基本的なキーワードと言うにはほど遠い」と指摘している。しかし、コロケーションという用語ではなく、「連語」などコロケーションに近い表現についての研究は多く見られる。国広 (1985) によると、「連語」とは「二語 (以上) の連結使用が、構成語の意味ではなく慣用により決まっているもので、全体の意味は構成語個々の意味から理解できるもの」である。また、「語連結」を「単なる語の連結」、「慣用句」を「二語 (以上) の連結使用が固定しており、全体の意味は構成語の意味の総和からは出て来ないもの」とし、三者の連結の固定度と意味の固定度の見地から比較して、以下の図 1 に示した (「+」は、固定度があるという意味である)。しかし、「この固定度には、語連結、連語、慣用句それぞれの内部でさまざまな度合が認められ、三者は連続体をしているので、はっきり区別できない場合も少なくない」と述べている。

	連結	意味
語連結	+	+
連語	+	
慣用句		

図 1. 国広 (1985, p. 6) による分類

また、宮地 (1985) の研究では、以下のような分類が示されている。

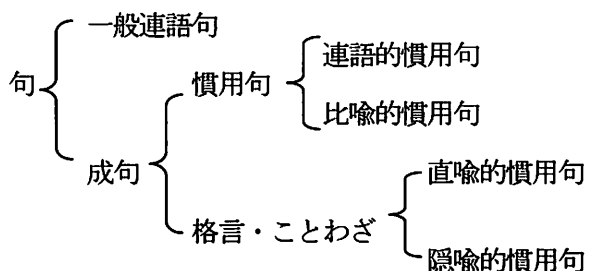


図 2. 宮地 (1985, p. 62) による分類

「一般連語句」とは、「二語 (以上) が、意味関係のゆるす限り、自由に結合してできる句」であり、「連語的慣用句」とは、「その結合に制約があって、慣用が固定的であるうえ、比喩的慣用句ほどには全体として派生的な意味を持たない句」である。この二つは、「唯一の結合以外は自由な結合と見るのか、二つの結合変容を持つものまでは固定的な結合に入れるのかどうかなど、規定のしかたによってゆれる」と述べている。具体例として、「一般連語句」は「雲が流れる」のようなものであり、連語的慣用

句は「汗をかく」のようなもの、比喩的慣用句は「油を売る」のようなものである。これらの用語や定義は完全に一致するわけではないが、「機能動詞結合」は、国広(1985)の「連語」、宮地(1985)の「連語的慣用句」に相当すると考えられる。

2. 2. 機能動詞結合に関する研究

2. 2. 1. 機能動詞の記述的研究

機能動詞の記述的研究においては、村木(1991)が最も体系的だと言える。機能動詞の定義をはじめ、機能動詞のあらわれかた、機能動詞結合の諸特徴、文法的意味などの側面から詳しく記述している。機能動詞のあらわれかたとして、機能動詞結合は「自由な語結合と慣用句の中間形態」と述べており、「機能動詞結合の結びつきは自由な語結合にくらべるとつよい」、「名詞句と動詞の間に、他の語句がはいりにくい」など、コロケーションと同じような特徴をあげている。また、機能動詞結合を構成する要素である名詞と動詞の性質について検討している。機能動詞と結びつく名詞は、動作、状態、現象を表す名詞であり、これを「動作性名詞」と呼ぶ。もう一つの要素である機能動詞の性質は、実質動詞として用いられている語結合(例:木の実をとる)と、機能動詞として用いられている語結合(例:連絡をとる)を対比しているが、「実質動詞と機能動詞のちがいといっても、それは絶対的なものとは言えず、いろいろな段階がありうる」と述べている。機能動詞の文法的意味として、ヴォイス的機能動詞(受動の意味を表す「(注意を)うける」など)、アスペクト的機能動詞(始動相を表す「(実行に)うつす」、実現相を表す「(合意に)達する」など)、ムード的機能動詞(動作主体の意志を特徴づける「(節約を)はかる」など)という三つの分類に分け、それぞれ具体的な機能動詞結合の用例を挙げている。

2. 2. 2. 日本語教育における機能動詞結合に関する研究

日本語教育の分野では、機能動詞結合に関する研究はまだ多くなされていない。谷部(2002)は漢語動名詞の機能動詞結合を取り上げ、新聞記事における機能動詞結合の使用実態を調査し、その使用実態の一端をみるとともに、指導上の留意点について考察した。「辞書には「～する」の表示があり、動詞の用法をみとめているが、実際には動詞用法はきわめてすくない、という例がみうけられる。「労働」「裁判」などは、その一例である」と述べている。また、「指示/連絡/調査/批判」などの動名詞は「する」と後接して動詞となるが、新聞記事を見ると「指示を受ける」「連絡をとる」「調査を受ける」「批判を招く」のような例が少なくないということを指摘している。鈴木(2009)は、中国人上級日本語学習者の作文コーパスを用いて、最も典型的な機能動詞「する」のコロケーションに関する誤用にはどのような傾向があるのかを明らかにした。コロケーションの誤用はコロケーションの結びつき自体を誤っている「結びつきの誤用」とコロケーションの結びつきは正しいが文脈を見ると誤用であると判断される「文脈上の誤用」とに分けられ、「結びつきの誤用」は「*質問をやらないでください(質問をしないでください)」、「文脈上の誤用」は「*両親思いの返事がしてきた

(答えが返ってきました)」などがあり、また類義語や類義コロケーションの混同「*悪事をしない(悪事を働かない/悪いことをしない)」、「する」の過剰使用も多かったと述べている。岡嶋(2014)は漢字圏の典型的言語として中国語を取り上げ、中国語を母語とする日本語中級学習者と12カ国の非漢字圏日本語中級学習者の作文を調査分析し、母語での漢字使用の有無が機能動詞結合の習得に影響を与えるか否かを検証した。中国語母語話者は非漢字学習者に比べ、著しく多くの機能動詞結合を産出し、正用も誤用も多く、中国語母語話者が用いていた機能動詞のうちには、スル動詞の割合が高かったという結果が得られた。さらに、中国語母語話者と非漢字圏学習者の誤用を比較し、共通するものとし、しないものをまとめた。

しかし、今までの研究は学習者のレベルが一つに限定され、調査の結果が一般化できない。学習者の習得が進むにつれ機能動詞結合の使用状況がどのように変化していくのかについての研究は、筆者が知る限りまだないようである。また、機能動詞結合の中に漢語の動作性名詞が最も多く現れるため、機能動詞結合の使用に母語の影響が強いと考えられる中国人日本語学習者を対象とした研究は岡嶋(2014)などが挙げられるが、中国人日本語学習者に対する機能動詞結合の指導上の留意点についての詳細な分析はまだ行われていない。

3. 研究目的

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者の機能動詞結合の習得に役立てることを目的に、コーパスを用いて、学習者のレベルが上がるにつれ機能動詞結合の使用状況がどう変化するか、またそのレベル別の特徴について考察し、次に、教科書調査を実施し、その結果から機能動詞結合の指導上の留意点を提案したい。

4. 研究方法

4.1. コーパス調査

本研究では、台湾の東呉大学が開発した「LARP at SCU コーパス」の作文データを使用した。同コーパスは東呉大学日本語学科に在学していた37名の学習者が大学1年から4年までの約3年半の間に書いた33種の課題作文の縦断的データである。作文の長さは600字程度で、辞書の使用は不可という制約のもと、2004年3月から2007年5月まで、月に1回、学習者全員が同じテーマの作文を書いた。コーパスから機能動詞結合を抽出し、誤用を分類し、学習者の日本語能力が上がるにつれ、機能動詞結合の使用状況がどのように変化していくのか、学習者に共通するものは何かを分析した。本研究は、最終回までLARPに参加した26名の学習者を分析対象とした。

抽出作業はまず、機能動詞結合を構成する二つの要素である、機能動詞と動作性名詞を選定した。機能動詞は、村木(1991)に挙げられている延べ133個の機能動詞を対象として選定した。動作性名詞は明確に定義されていないが、サ変名詞と動詞の連用形は、「動詞との間に形態上の共通点がみとめられ、つまり動詞と派生関係にある名詞である」と村木(1991)が述べているため、本研究ではサ変名詞と動詞の連用形を

動作性名詞として抽出対象とした。抽出作業はまず、形態素解析ソフトウェアである茶まめ (Unidic-Mecab2.1.2)³ を利用し、作文データを形態素解析にかけ、Excel に出し、解析結果からサ変名詞と機能動詞の結合を抽出した。品詞タグのうち、「名詞-普通名詞-サ変可能」(例:「賛成」「抵抗」)、「名詞-普通名詞-サ変形状詞可能」(例:「退屈」「迷惑」)と「接尾辞-名詞的-サ変可能」(例:「少子化」の「化」)に限定した。形態素解析の結果と作文の原文を対照し、サ変名詞の後ろに来るのが「助詞+機能動詞」の場合、その結合をコロケーションとして抽出した。動詞の連用形と機能動詞の結合(例:「感じがする」)は、著者自身が作文を読み、目視で抽出した。また、日本語にない名詞と機能動詞の結合(例:「*経験を受ける」)や、書き間違い(例:「*ベレンスをとる(バランスをとる)」)、機能動詞結合であるべきなのに機能動詞結合ではないもの(例:「*関心する」(「関心を持つ」))を使用した場合もあるため、目視で上記の用例を抽出した。抽出作業が完了後、日本語母語話者と共に正誤判断を行った。

4. 2. 教科書調査

学習者が機能動詞結合に出会う頻度を調べる必要があると考えているため、教科書調査を実施する。LARP に参加した学習者が 2004 年から 2006 年の間に「初級日本語」、「中級日本語」、「高級日本語」、「日本語会話」の授業で使用した教科書を調査対象とする。教科書は、『進学する人のための日本語初級』、『新文化初級日本語初級 I、II』、『中級の日本語』、『日本語中級読解入門』、『テーマ別 中級から学ぶ日本語』、『テーマ別 上級で学ぶ日本語』の 7 冊である。当時使用した教科書の詳細な版は確認できないが、LARP の学習者は 2003 年に入学したため、2003 年以前に出版されたものを調査対象とする。調査方法については、目視で調査対象とする部分から機能動詞結合を抽出する。同一の教科書に現れた機能動詞結合は、異なり数で数える。

4. 3. 誤用とするものと誤用としないもの

本研究で誤用とするものと誤用としないものは、以下のとおりである。

誤用とするものは、機能動詞結合自体は正しいが文脈から判断すると不適切であるもの(「*勉強もしないで、両親に迷惑をかけます」(両親を心配させます))、機能動詞結合であるべきなのに機能動詞結合ではないもの(「*関心する」(関心を持つ))、日本語に存在しない動作性名詞と機能動詞の結合(「*影響を引く」(影響を与える))、ヴォイスの誤り(「*影響を受けさせる」(影響を受ける))、助詞の誤り・脱落・過剰使用(「*影響を受ける」(影響を受ける))、名詞の選択上の誤り(「*農事をする」(農作業をする))、動詞の選択上の誤り(「*経験を受ける」(経験を得られる))、この七つの種類である。

誤用としないものは、送り仮名、音便形、漢字表記や外来語表記などの書き間違い

³ 「茶まめ | Unidic」: http://download.unidic.org/?page_id=20

Mecab: <http://taku910.github.io/mecab/>

と判断されるものである。

5. 作文コーパスの分析

5. 1. 正用数と誤用数

26名分の作文データから機能動詞結合を抽出し、上記の判断基準に基づいて正誤判断を行い、その結果を表1にまとめた。この26名の学習者は最終回まで参加したが、作文原稿を収集する過程で資料が失われたこともあるため、作文数にばらつきがある。表1を見ると、正確な機能動詞結合を最も多く使用しているのは学習者10番の延べ44回であり、これに対して最も使用数が少ないのは学習者14番の延べ10回である。誤用数の最も多いのは学習者5番の延べ12回で、学習者6番、15番、20番の作文には誤用が見られなかった。また、学習者は平均約24回機能動詞結合を正しく使用していることになる。

表1 学習者ごとの正用数と誤用数

学習者番号	正用数 (延べ)	誤用数 (延べ)	作文数	学習者番号	正用数 (延べ)	誤用数 (延べ)	作文数
1	23	3	32	20	18	0	33
4	15	1	26	21	34	3	33
5	38	12	33	24	16	3	33
6	21	0	33	25	23	2	33
8	22	3	33	26	41	1	33
9	21	8	33	27	23	2	33
10	44	1	33	28	15	5	33
12	22	5	31	29	28	6	33
14	10	2	33	30	36	1	33
15	17	0	32	31	24	3	32
16	12	4	30	34	29	3	33
18	25	5	30	35	20	10	33
19	19	5	25	37	29	1	32
				合計	625	89	831

5. 2. 全体の使用傾向

5. 2. 1. 正用のタイプと誤用のタイプ

表2と表3は、正用のタイプ、誤用のタイプの縦断変化を示すものである。表2に示しているように、学習者が2年生になると、使用する機能動詞結合の正用のタイプも誤用のタイプも増えた。正用について、最初は「サ変名詞+を+する」だけが見られるが、2年目から「動詞の連用形+助詞+する」や「サ変名詞+助詞+機能動詞」も出てきた。しかし、全体的に見ると、「サ変名詞+助詞+する」が最も多く、正用例の69.6%を占めており、「動詞連用形+助詞+する」タイプは8.0%、「動詞連用形+助詞+機能動詞」タイプは1.4%、「サ変名詞+助詞+機能動詞」タイプは21.0%であ

った。

表2 正用のタイプの縦断変化

学年	正用のタイプ			
	サ変名詞+助詞+する	動詞連用形+助詞+する	動詞連用形+助詞+機能動詞	サ変名詞+助詞+機能動詞
1年後期	113	1	1	0
2年前期	87	4	0	2
2年後期	52	12	1	32
3年前期	49	12	2	30
3年後期	59	15	1	9
4年前期	46	6	3	46
4年後期	29	0	1	12
合計	435	50	9	131

誤用のタイプについては、日本語にない名詞と機能動詞の結合が延べ53例で、最も目立っている。特に初級段階の学習者が、ある名詞の後ろにどのような動詞をつけるのか分からない場合は、「する」をつけて使用していると推測できる。そのため、「迷子をする」、「人気をする」のような誤用が見られた。「する」をつける場合が最も多いが、「影響を引く」（影響を与える）、「生活を持つ」（生活を送る）など、動詞を間違えて選択し、日本語にない機能動詞結合を作ってしまう例も見られる。学習者のレベルが上がるにつれ、使える表現が多くなった一方で、誤用のタイプも増えてきた。1年次後期の作文では四つのタイプの誤用が見られたが、2年次前期から誤用のタイプが増加した。表3は、誤用タイプの縦断変化を示している。なお、一つの誤用が、複数のタイプに分類されている場合がある。たとえば「優勝を取る」は、日本語にない機能動詞結合でもあり、動詞の選択上にも問題があるため、二つのタイプに分類した。

表3 誤用のタイプの縦断変化

	文脈	日本語に存在しない	機能動詞結合にならない	ヴォイス	助詞	名詞の選択	動詞の選択
1年後期	0	10	0	1	0	1	1
2年前期	3	9	0	1	2	1	4
2年後期	1	9	0	0	1	1	8
3年前期	2	10	2	0	1	1	5
3年後期	0	7	0	1	2	1	5
4年前期	0	6	1	3	1	1	4
4年後期	0	2	1	1	0	0	3
合計	6	53	4	7	7	6	30

学習者が共通してよく使う機能動詞結合は何かを明らかにするため、作文から抽出した機能動詞結合の頻度と異なり使用人数を出現頻度の順に上位30位までまとめたものが表4である。表4が示しているように、出現頻度が最も高いのは「感じがする」で、47回出現している。使用人数が最も多い機能動詞結合は「仕事をする」で、22

名の学習者に使われており、学習者の過半数を超えている。「電話をかける」、「計画をたてる」、「関心を持つ」、「迷惑をかける」、「バランスをとる」など、結びつきが強く、学習者の母語に直訳しにくいいため、一つのセットとして覚えたと考えられるものは、学習者が多く使用しており、誤用も少ない。岡嶋（2014）は、漢字圏の学習者と非漢字圏の学習者の機能動詞結合の使用状況を比較する際に、非漢字圏の日本語学習者がこのような名詞と機能動詞をセットにしてコロケーションとして習得していると推測しているが、漢字圏の学習者も同じように習得しているのではないかと考えられる。

表4 機能動詞結合の出現頻度と異なり使用人数（出現頻度順、上位30位）

機能動詞結合	出現頻度	使用人数	機能動詞結合	出現頻度	使用人数
感じがする	47	15	スポーツをする	12	7
勉強をする	46	19	買い物をする	10	9
仕事をする	44	22	計画を立てる	10	8
アルバイトをする	34	17	バランスをとる	9	9
旅行をする	23	14	運動をする	9	6
電話をかける	21	11	宿題をする	8	8
食事をする	20	10	お喋りをする	8	4
話をする	19	12	リサイクルをする	8	6
恋をする	19	12	デモを行う	7	6
準備をする	19	12	影響を受ける	5	3
関心を持つ	17	7	外食をする	7	4
旅をする	14	9	生活をする	6	5
迷惑をかける	14	11	デモをする	5	5
影響を与える	14	10	世話をする	5	3
掃除をする	12	9	家事をする	5	5

5. 2. 2. 作文のテーマとの関係

LARPの作文テーマは33種類もあるため、学習者の使用傾向を見る際に、出現した機能動詞結合が、作文のタイトルにどのように影響されるかを確認する必要がある。確認した結果、「アルバイトをする」「感じがする」「影響を与える」「迷惑をかける」などは、タイトルに関わらずよく出現している一方、「勉強をする」（第2回「春休み」、第5回「高校生活」など、学生の日常生活に関わるテーマ）、「デモを行う」（第26回：「台湾のデモについて」）、「リサイクルをする」（第27回：「ゴミ問題」）、「恋をする」（第32回：「大学生の恋愛観」）などの機能動詞結合は作文のテーマによって偏る傾向が見られる。また、機能動詞結合が出て来ない作文は一つもなかった。機能動詞結合の延べ回数が一番多いのは作文1「私の一日」の42回に対し、一番少ないのは作文24「私の愛読書」での6回であった。「私の一日」という作文における機能動詞結合の延べ回数が最も多い原因は、大学生の一日の行動を記述しようとする、必ず「勉強」「アルバイト」など、動作を表す言葉が多く使用されるからであろう。また、後述の第6章にも関連するが、これらの機能動詞結合は多くの初級教科書で扱われており、初級段階で最も早く導入され、学習者に早くから習得されていると考えられる。

5. 3. 学習者に共通する誤用

5. 3. 1. 「関心」に関する機能動詞結合の使用

サ変名詞の「関心」(*関心する→関心を持つ)に関する機能動詞結合の使用には、複数の学習者による誤用が見られる。

(4) *政治のことに對してあまり関心していない人たちもむりやりに政治の話に巻き込まれてしまいました。 (学習者 24、作文 19)

(5) *今にただ少ない人だけ政治に関心します。 (学習者 14、作文 19)

上記の例のように、「関心をもつ」であるべきなのに、「関心する」という日本語にない表現が見られる。このほか、機能動詞結合の誤りではないが、(6) (7) のように「関心する」を使用している文がある。

(6) *彼女はいつもそばにいて、何でも得らず関心してくれていますから。

(学習者 27、作文 13)

(7) *内容にただいくつか短いセンテンスがあったが、母は私に関心することや祝福することがいっぱい込めていました。 (学習者 10、作文 13)

「関心する」を使用しているのは、学習者 10 番、14 番、24 番、27 番の 4 名である。なお、10 番、14 番、27 番は、その後に書いた作文では、「関心を持つ」と正しく使っているが、学習者 24 番は、作文 15 では「関心を持つ」と正しく使用しているのに、その後の作文 19 にまた「関心する」を使用しており、使用の「ゆれ」が見られた。

(8) ですから、政治に対して、あまり関心を持ちません。 (学習者 10、作文 19)

(9) ファッションの雑誌や番組などにたいへん関心を持っていたり、...

(学習者 24、作文 15)

(10) 社会に関心を持ったほうがいいだろう。

(学習者 27、作文 19)

このような誤用の要因は、母語転移の可能性が考えられる。張 (2009) の中国人学習者による作文に見られる母語転移の諸類型を明らかにした研究では、日中両言語は同形同義で、品詞性がずれていることを原因とし、中国語を母語とする日本語学習者の「関心」の誤用例を挙げている (自分のことだけ考えて、あまり他人のことを関心したくない時だった)。しかし、辞書で調べると、日中両言語の「関心」の意味は以下の通りである。

関心 (日) : (名) 物事に興味を持ったり、注意を払ったりすること。 (『大辞林』)

(例: 政治に関心を持つ。)

关心 (中) : (動) 心をよせる、気にかける (『クラウン中日辞典』)

(例: 关心灾区儿童的_{生活}。(被災地の子どもたちの生活を気遣う。))

(把人或事物) 常放在心上; 重视和爱护 ((人やものを) いつも忘れないように
気に留める; 重視する、大事にする) (『現代漢語辞典』)

つまり、日中両言語において「関心」は品詞性のずれがあるだけではなく、意味にも違いがある。文化庁(1978)の分類基準に従うと、「関心」はOに分類されていると考えられる。日本語の「関心」と比べ、中国語の「关心」の意味範囲は広く、学習者が持つ中国語の知識を直接日本語に持ち込んだことが、誤用の原因の一つであろう。また、中国語の「关心」は動詞で、そのまま使う一方、日本語の「関心」は名詞で、動詞化しようとする、後ろに必ずなんらかの動詞をつけなくてはならない。「関心」のように日中両言語において意味と品詞のずれがあるため起こる誤用は、この26名の学習者の他の作文には見られなかった。

5. 3. 2. 使用の繰り返し

データを詳細に観察すると、ある時点から、作文のテーマに関わらず、同じ機能動詞結合を繰り返して使用する傾向があることがわかる。6. 2. 2に述べているように、作文のテーマと強く関わっており、横断的に見ると特定の作文に複数回の使用が見られるのに対し、特定の学習者が複数の作文で同一の機能動詞結合を繰り返して使用している傾向もある。

- (11) 携帯電話の使い人は若くなるから、新しい功用も増えてきます。前は電話をかけることだけです。 (学習者 37、作文 12「携帯電話」)
- (12) 母に安心のために電話をかける時はよくうれしそうな声をします。 (学習者 37、作文 13「母の日」)
- (13) 電話をかけた後気分もよくなりました。 (学習者 37、作文 14「友情」)
- (14) どこでも電話をかけるができる。 (学習者 37、作文 17「私の愛用品」)
- (15) つまらない時に電話があれば、面白くなる。もちろん、電話をかけることができる。 (学習者 37、作文 17「私の愛用品」)

(11)の用例は「携帯電話」という作文から抽出したもので、テーマによる影響の可能性が高い。しかし、下の四つの例文を見ると、学習者が「電話をかける」という表現を習得したので、多く使用したいため、わざと「電話」についての話題を取り上げたと推測できる。なお、村木(1991)は、機能動詞結合の特徴として、「機能動詞結合には、「～する」と交替するものがある。「決定をください⇔決定する」といった交替である」と述べている。「電話をかける」と「電話(を)する」もこのように交替できる例である。しかし、「電話をかける」を繰り返して使っているのはこの学習者だけではなく他にも見られ、調査対象とする26名の全作文において「電話をする」という例は一例もなかった。その原因は2点が考えられる。まず、作文を書く際は、文字数の指定があり、学習者が文字数を増やすため、一つのストラテジーとして、「電話(を)する」と言いたいところを文字数がより多い「電話をかける」に書きかえた可能性が考

えられる。もう一つの原因として、学習者のインプットに「電話をかける」が多く、それがアウトプットに反映されたことも考えられる。

その他、「感じがする」は、5.1.2の表4に示している通りに、出現頻度が一番多く、特に後半から作文テーマを問わず過半数の学習者に使われている。その中で、学習者26番は第14回から第25回までの11回の作文に、「感じがする」を10回使用しており、繰り返しの回数が最も多い。その他、学習者8番は第17回から第29回までに7回、学習者29番は第14回から第25回までに5回「感じがする」を使用している。まだ中級段階で、使える表現が限られているため、同一の機能動詞結合を繰り返して使う可能性があるのも考えられる。また、「感じがする」は作文のテーマや内容に影響されず、使用しやすいので、よく出現していると考えられる。

6. 教科書調査

まず、2004年から2006年まで学習者が使用していた7冊の教科書から、延べ130種の機能動詞結合を抽出した。全体の傾向をまとめると、教科書には機能動詞結合だけではなく、コロケーション全体の量が少なく、あまり重視されていないと言えよう。谷口(2001)では、教科書調査を実施し、よく使われている日本語の初級教科書を5冊選び、その中で扱われているコロケーションを集計した結果、教科書に共通するコロケーションが少なく、日本語教育におけるコロケーションの重要性に関する認識が低いと指摘している。さらに、「教える側としては、コロケーションを単語と同等に重要な指導項目として認識し、積極的にシラバスの中に組み入れていくことが必要と思われる」と述べている。谷口(2001)の調査対象と本研究の教科書は異なるが、教科書で扱われるコロケーションの量とコロケーションの重要性に対する認識について、同じ結論が得られた。

また、複数の教科書に扱われている機能動詞結合を表5にまとめた。「電話をかける」と「食事をする」は4冊に共通し、3冊に共通の機能動詞結合が6例、2冊に共通のものが12例であった。共通の機能動詞結合の特徴として、「電話をかける」以外、すべての機能動詞結合が「サ変名詞+を+する」タイプのものである。

教科書に出現している機能動詞結合は、学習者が作文に使用しているものとどれくらい共通しているかを明らかにする必要があると考えられる。そのため、多くの学習者が使っている機能動詞結合が、どの時期に書かれたのかを調べた。表6は、複数の学習者に使用されている機能動詞結合を使用人数順で示しており、各機能動詞結合は最初がどの時期で教科書に出現しているかをまとめた。表7に挙げている36種の機能動詞結合のうち、教科書に扱われているのは21種で、全体の58.3%を占めている。多くの学習者に使われている機能動詞結合を、初級の教科書に出現しており、日本語学習の早い段階で導入され、習得が早いと考えられる。学習者に使用されているが、教科書に出現していない機能動詞結合は、学習者がどのように習得したかはまだ明らかにすることはできなかった。また、多くの学習者に使われており、結びつきが強く、ひとまとまりにして習得したと考えられる「電話をかける」、「バランスをとる」「影響

調査報告

を与える」「計画を立てる」「関心を持つ」は、いずれも教科書に出現している。本研究の調査対象とした教科書は、シラバスによって使い方が違うが、学習者はこれらの機能動詞結合を授業中で習得した可能性が高いと言えよう。LARP の作文テーマは 33 種類もあり、様々な表現を使う機会を学習者に与えている。しかし学習者に使用されている機能動詞結合の種類は多いとは言えず、この原因は学習者にインプットされた機能動詞結合の種類が少ないことによると考えられる。学習者が作文を書く際に使用した機能動詞結合が教科書にない場合は、誤用が生じやすいだろう。そのため、教科書の作成にあたっては、学習者が使える表現を増やすため、機能動詞結合だけでなく、コロケーション全体を重視する必要があるだろう。さらに、日本語母語話者のコーパスなどを利用し、母語話者の使用実態を参照し、機能動詞結合を選定する必要があるだろう。

表 5 教科書に共通の機能動詞結合

機能動詞結合	出現冊数	機能動詞結合	出現冊数	機能動詞結合	出現冊数
電話をかける	4	掃除をする	3	生活をする	2
食事をする	4	準備をする	3	夜更かしをする	2
勉強をする	3	話をする	2	洗濯をする	2
仕事をする	3	世話をする	2	約束をする	2
経験をする	3	買い物をする	2	散歩をする	2
アルバイトをする	3	予約をする	2	遅刻をする	2

表 6 機能動詞結合の使用人数と出現時期（使用人数順、上位 30 位）

機能動詞結合	使用人数	出現時期	機能動詞結合	使用人数	出現時期
仕事をする	22	2004～2005	スポーツをする	7	2004～2005
勉強をする	19	2004～2005	運動をする	6	2004～2005
アルバイトをする	17	2004～2005	リサイクルをする	6	
感じがする	15	2005	デモを行う	6	
旅行をする	14	2006	生活をする	5	
話をする	12	2004	デモをする	5	
恋をする	12		家事をする	5	
準備をする	12	2004～2005	お喋りをする	4	2005
電話をかける	11	2004～2005	外食をする	4	
迷惑をかける	11		ショッピングをする	4	
食事をする	10	2004～2005	挨拶をする	4	
影響を与える	10	2005	影響を受ける	3	
旅をする	9		世話をする	3	2004
掃除をする	9	2004～2005	食事を取る	3	
買い物をする	9	2004～2005	復習をする	3	2004～2005
バランスをとる	9	2006	考えを持つ	3	
計画を立てる	8	2005	喧嘩をする	3	
関心を持つ	7	2005	努力をする	3	2005

7. まとめと今後の課題

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者の機能動詞結合の習得に役立つこ

とを目的として、コーパス調査と教科書調査を行った。第6章では、中国語母語話者の作文コーパスから抽出した機能動詞結合の横断的分析と縦断的分析を行った。横断的分析では、学習者に使用されている機能動詞結合の正用タイプと誤用タイプをそれぞれ分類した。学習者の正用例のうち70%以上が「サ変名詞+助詞+する」タイプで、誤用例のうち最も多いのが「日本語にない名詞と機能動詞の結合」であることが明らかになった。学習者が使用した機能動詞結合は、作文のタイトルや内容にどのように影響されたかを確認するために、作文ごとに、複数回に使用された機能動詞結合を集計した。その結果、「アルバイトをする」「感じがする」「影響を与える」などはタイトルに関わらずよく出現している一方、タイトルに強く影響されている機能動詞結合もあった。また、学習者に共通の誤用があり、日中両言語における意味と品詞性のずれが原因で、「関心」に関する機能動詞結合の使用に「ゆれ」が見られた。縦断的分析では、学習者による機能動詞結合の使用の通時的变化を分析した。学習者の日本語能力が上がるにつれ、機能動詞結合の正用のタイプも誤用のタイプも増えてきた。複数の学習者には、ある機能動詞結合を習得後に、その機能動詞結合を作文に繰り返して使う傾向が見られた。第7章では、学習者がLARPに参加した3年半の間に使っていた6種類の教科書から機能動詞結合の扱い方を調査し、分析を行った。全体的に見ると、共通の機能動詞結合が少なく、初級段階の基本的なものが多いことが明らかになった。教科書に出現している機能動詞結合は、質、量ともに十分であるとは言えず、教科書の改善が期待される。

機能動詞結合の指導上の留意点に関しては、第1にその機能動詞結合と類義関係があるものや、学習者の母語における意味と品詞性のずれがあるも同時に提示すべきだと考えられる。第2に、母語話者の使用実態を参照し、学習者にとって身近なトピックに関連する機能動詞結合を導入することである。第3に、母語の影響を考え、学習者の母語と異なるものは、その違いを学習者に気づかせることである。

しかし、本研究の対象者は中国語母語話者のみで、他の言語を母語とする日本語学習者との比較を行っていないため、母語の影響についての考察はまだ不十分である。また、コーパス調査のため、学習者は正しく使える自信のないものを回避した可能性がある。さらに、学習者の使用実態と教科書における機能動詞結合の扱い方を調査したが、学習者の使用意識について、まだ明確になっていない。今後の課題として、中国語母語話者だけではなく、他の言語を母語とする日本語学習者も分析対象としたい。また、テストなどで強制的に機能動詞結合を産出させ、学習者の使用実態を明らかにしたい。

参考文献

- 岡嶋裕子 (2014) 「母語での漢字使用の有無は機能動詞結合の習得に違いを生ずるか—日本語学習者の作文における産出使用を対象に—」『言語情報科学』(12) pp. 73-89, 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻.
- 国広哲弥 (1985) 「慣用句論」『日本語学』4(1), pp. 4-14, 明治書院.

調査報告

- 鈴木綾乃 (2009) 「上級日本語学習者の動詞コロケーションに関する誤用—「する」を中心に—」『日本語教育学研究への展望：柏崎雅世教授退職記念論集』, pp. 61-77, ひつじ書房.
- 谷口秀治 (2001) 「日本語教育におけるコロケーションの扱い」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』 47, pp. 381-386.
- 田野村忠温 (2012) 「日本語のコロケーション」『これからのコロケーション研究』 pp.193-226, ひつじ書房.
- 張麟声 (2009) 「作文語彙に見られる母語の転移—中国語話者による漢語語彙の転移を中心に」『日本語教育』 140, pp. 59-69, 日本語教育学会
- 文化庁 (1978) 『中国語と対応する漢語』 大蔵省印刷局.
- 宮地裕 (1985) 「慣用語の周辺—連語・ことわざ・複合語」『日本語学』 4(1), pp. 62-75, 明治書院.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房.
- 谷部弘子 (2002) 「日本語中級段階の漢語運用に関する一考察—漢語動名詞の機能動詞結合を中心に—」『東京学芸大学紀要 2 部門』 (53) pp. 147-155, 東京学芸大学紀要出版委員会.
- 辞書
- 『現代漢語辞典 修訂本』 (2000) 商務印書館.
- 『クラウン中日辞典』 (2001) 三省堂.
- 『大辞林 第三版』 (2006) 三省堂.
- 教科書
- 『進学する人のための日本語初級』 凡人社, 1996.
- 『新文化初級日本語』 I、II 文化外国語専門学校, 2000.
- 『中級の日本語』 The Japan Times, 1995.
- 『日本語中級読解入門』 アルク, 1991.
- 『テーマ別 中級から学ぶ日本語』 研究社, 2003.
- 『テーマ別 上級で学ぶ日本語』 研究社, 1994.
- 作文コーパス
- 金澤裕之編 (2014) 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』 ひつじ書房.
- 「日本語学習者作文コーパス」: <http://sakubun.jpn.org/>
- 「LARP at SCU コーパス」: 東呉大学日本語日本文学科

(そう はいいく・首都大学東京大学院博士前期課程修了生)